

農地開発と増える村むら —江戸時代(1)—

天正18年(1590)、豊臣秀吉は関東のほとんどを支配していた戦国大名北条氏(後北条氏)を滅ぼし全国を統一します。秀吉の命により関東に領地を与えられた徳川家康は、川越や忍(おし:行田市)・岩槻など県内の諸城に徳川家譜代(ふだい)の有力な家臣を配置し、その他は直轄領や中小の家臣(旗本)の領地としました。

また、神社仏閣にはたびたび朱印状(しゅいんじょう)などを発行して所領を安堵したり、寄進したりして寺社の権利を認めつつ支配していきました。蓮田市内でも平源寺(へいげんじ)に朱印状などが残されています。

関ヶ原の合戦に勝利した徳川家康は、慶長8年(1603)に江戸に幕府を開きました。以後明治維新までの約260年間は江戸時代となります。

江戸時代の蓮田の村々は、岩槻藩の領地や旗本(将軍直属の家臣)の領地、幕府の直轄地でした。こうした村々を支配していた領主は、村々の支配にあたり、名主・組頭・百姓代といわれる村役人を置き、年貢の徴収や治安維持などを行わせました。領主は江戸を中心とする城下町に住んでいることが多く、領主からの年貢の請求やさまざまな命令は年貢割付状(ねんぐわりつけじょう)や御用状(ごようじょう)などの文書により村々に伝えられました。

領主が複数の村に同じ内容を伝達する場合、村から村へと回覧する廻状が利用される場合もありました。名主はこうした御用状や廻状などの内容を村人に伝達し、また記録に書き留めました。江戸時代はこうしてさまざまな文書により支配が行われたことが特徴です。そして、こうした文書のやりとり

が、江戸時代の庶民の識字率を上昇させる原因の一つになったといわれています。

江戸時代の蓮田の村の数は、**慶安2、3年(1649, 1650)頃には、市内の村は13か村ほど**でしたが、その後、新田開発で新しい村ができたり、大きい村が分かれたりするなどして村数が増加し、**元禄期(1688~1703)頃には20か村**となり、明治時代の初めまで続きました。

また、江戸時代は新田の開発がすすみました。蓮田市域も新田開発が行われており、蓮田市域の村々も田が増加しましたが、ほかの地域にくらべると比較的畑がちの村が多かった。畑の作物では、大豆や大麦・小麦・稗・粟・木綿などの他、**近世後期からは甘藷の栽培が始まった**ようです。明治の初め頃には市域全体で甘藷が栽培されており、やがて鉄道が開通すると、蓮田駅から多数の甘藷が出荷されるようになりました。

江戸時代の蓮田の村々

慶安2、3年(1649, 50) ~ 寛文12年(1672)頃



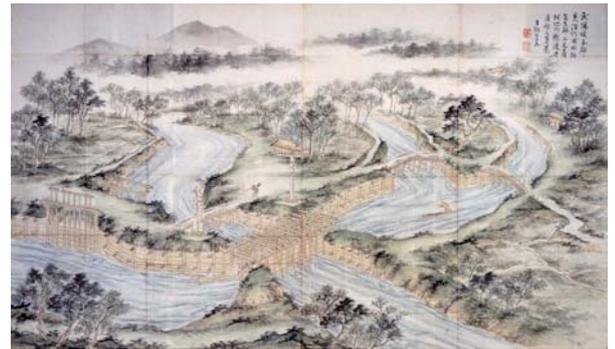
ほぼ現在の字が村の境であることが読み取れます。また、黒浜村から長崎村と笹山村は寛文12年(1672)前後に分村され、閨戸村からもこの頃分村されています。この図では、山の神村や長崎村は抜いています。



全阿弥書状 (平源寺蔵)



蕃薯解 (ばんしょかい)
文化二年(1805) (篠崎家文書)
さまざまな種類のさつま芋の栽培方法料理法について解説されている本です。



瓦葺 (かわらぶき) の掛樋井 (かけどい)
瓦葺の掛樋井上流から舟が何かの荷を積みながら下流へと向かう様子が描かれています。



伊奈忠次制札 (平源寺蔵)



- 貝塚を伴う遺跡
- 近世の遺跡

瓦葺の掛樋井

中世の信仰 — 鎌倉時代以降の人々の信仰 —



寅子石 県指定

市内からは死後の極楽往生(ごくらくおうじょう)を願う当時の武士・民衆の信仰の一端を窺(うかが)わせる板碑(いたび)が現在までに174点確認・出土しています。板碑(いたび)は、主に供養塔として使われる石碑の一種で、「板石卒塔婆(いたいしそとうば)、板石塔婆(いたいしとうば)」とも呼ばれます。寅子石に代表される武蔵型板碑は、秩父産の緑泥片岩を加工して造られるため、「青石塔婆(あおいしとうば)」とも呼ばれます。この時期、仏教が当時の武士たちに鎌倉仏教として広く信仰され、武蔵武士の本拠地であった埼玉県内には現在、約2万基にのぼる板石塔婆があり、質・量ともに全国一の規模を誇っています。基本構造は、板状に加工した石材に梵字=種子(しゅじ)や被供養者名、供養年月日、供養内容を刻んだもので、頭部に二条線が刻まれますが、実際には省略されるものもあるようです。また、末期の小さい板碑に法名と没年月日を刻んだ簡単なものは、中級階層の庶民たちの墓塔と思われま

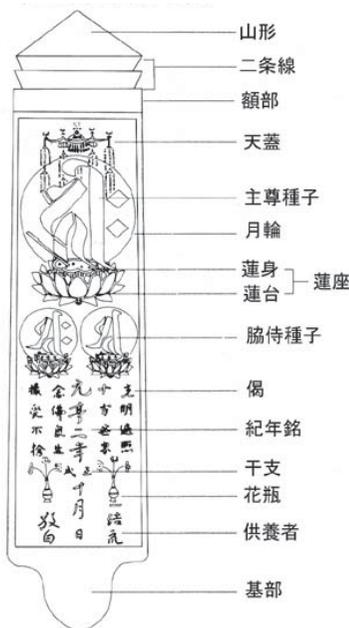
す。分布地域は、関東を中心に日本全国に分布していますが、鎌倉武士の本拠地とその所領に限られ、鎌倉武士の信仰に強く関連すると考えられています。造立時期は、鎌倉時代～室町時代前期に集中しています。現在知られる板碑では、埼玉県熊谷市(旧江南町)須賀広発見の嘉禄3年(1227)のものが最も古く、埼

玉県内に古い板碑が集中している傾向が認められます。市内で最も古いものは、弘安8年(1285)銘で、新しいものは永禄元年(1558)ですが、全国的な傾向と同様で14～15世紀が中心のようです。

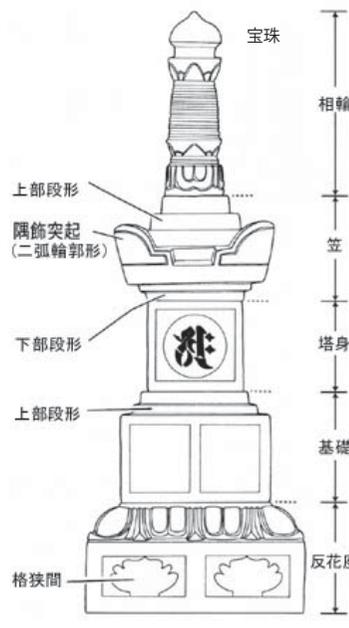
市内では、特に「寅子石(とらこいし)」と呼ばれる延慶4年(1311)銘板碑が大字馬込字辻谷に所在し、高さ4mの埼玉県下で2番目に大きい板碑です。唯願法師が真仏法師(親鸞の直弟子)の報恩供養のために建てられたものです。この他に延元元年(1336)の南朝銘の年号が刻まれた板碑も存在し、市内にも南北朝の争乱の影響があった可能性も想定されます。板碑は文字資料が数少ない蓮田の中世の状況を窺い知ることのできる資料の一つです。

宝篋印塔(ほうきょういんとう)は、墓塔・供養塔などに使われる仏塔の一種で、五輪塔(ごりんとう)と共に多く造られる石造物の一つです。

宝篋印塔の最上部の棒状の部分は相輪(そうりん)と呼ばれる部位で頂上に宝珠を乗せ、その下に請花(うけばな)、九輪(宝輪)、伏鉢などと呼ばれる部分があります。相輪は宝篋印塔以外にも、宝塔、多宝塔、層塔などにも見られるもので、単なる飾りではなく、釈迦の遺骨を祀る「ストゥーパ」の原型を残した部分です。相輪の下には笠があり、この笠の四隅には隅飾(すみかさざり)と呼ばれる突起が造られます。笠の下の方角の部分は、塔身(とうしん)、さらに下の方角部分は基礎(きそ)と呼ばれる部位で構成されます。この塔身部に四角の輪郭を刻んで基礎部に格狭間(こうざま)が二つあるものは、「関東形式」と呼ばれ、四角の輪郭が刻まれずに基礎部の格狭間が一つの型が



板石塔婆の部分名称
「遺史園」より



宝篋印塔の部分名称
「遺史園」より

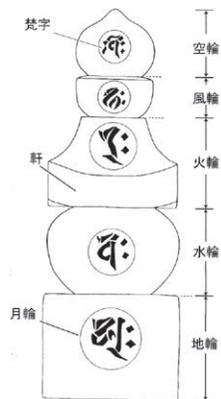
「関西形式」と呼ばれる基本型です。名称のとおり、関西形式は関西地方に、関東形式は関東地方に分布しています。ただし、時代・地方により多少の違いが見られます。例えば、頂上部の宝珠は、時代が下るとともに、膨らみが失われ、室町期・江戸期を通して先端が尖っていくという特徴があります(この特徴は、宝珠全体のもので、五輪塔・宝塔・石灯籠・擬宝珠(ぎぼし)でも同様です)。また、隅飾も時代が下るごとに、外側へ張り出す傾向があり、江戸期には極端に反り返る隅飾へと変化しました。基壇も次第に反花座などの飾りをもたない方形石の基壇へと変化しました。この他にも、塔身・基礎部の大きさの違いをはじめ、塔身に種子、仏像のレリーフを刻むものや、二重輪郭をとるものなど、塔によって様々な形態があります。

五輪塔(ごりんとう)も主に供養塔・墓塔として使われる仏塔の一種で、「五輪卒塔婆(そとうば)、五輪解脱(げだつ)」とも呼ばれます。五輪塔の形はインドが発祥といわれ、本来舍利(お骨)を入れる容器として使われていたといわれていますが、日本では平安末期から供養塔、供養墓として使われるようになりました。石材は安山岩(あんざんがん)や花崗岩(かこうがん)が多く使われ、小さいものでは凝灰岩(ぎょうかいがん)も多く使われます。他に木製、金属製、鉱物製(水晶)などの塔もあります。五輪塔は下から方形(地輪:ちりん)・円形(水輪:すいりん)・三角形又は傘形・屋根形(火輪:かりん)・半月形(風輪:ふうりん)・宝珠形(空輪:くうりん)を積み上げた形に作られます。五輪塔も製作された時代・時期、用途によって形態が変化します。特に、石造のものは変化に富んでおり、例えば一つの石から彫りだされた小柄な一石五輪塔(いっせきごりんとう)、火輪の形が三角錐(さんかくすい)の三角五輪塔、地輪(四角)の部分が長い長足五輪塔(ちょうそくごりんとう)と呼ばれるものなどの様々な形のものがあります。また、板碑(いたび)や舟形光背(ふながたこうはい)に彫られたものや、磨崖仏(まがいぶつ)として彫られたものもあり、浮き彫りや線刻(清水磨崖仏などに見られる)などで表現されています。

特殊な例としては、一般的に塔婆(とうば)や卒塔婆(そとうば)と呼ばれる木製の板塔婆や角柱の卒塔婆も五輪塔の形態を持ちますが、五輪塔とは言わず単に塔婆や卒塔婆といいますが、五輪塔もインドにおける仏舍利(ぶっしゃり)を収めたストゥーパの中国における漢字による当て字で、日本では略して塔婆や塔ともいわれます。

また、鎌倉時代末の正和3年(1314)銘の刻まれた「鰐口(わにぐち:個人所蔵)」が江ヶ崎の久伊豆神社周辺から出土しています。この鰐口(神社の鐘)には「寄進者行連(ぎょうれん)」の銘が刻まれています。周辺には江ヶ崎城も存在し、鰐口とほぼ同時期の館跡でもあり、関連性も推測されます。

市内では非常に数の少ない中世の文字資料であり、鰐口としても県内で最も古い鎌倉時代の貴重な資料です。



五輪塔の名称
「遺史園」より



正和3年(1314)銘鰐口(個人蔵)